

かつては夏場の必需品 やさしい風をつくる扇子

京都から伝えられた扇子づくり

日本舞踊や落語など、伝統芸能に欠かせないのが扇子です。扇子の発祥は中国で、日本に伝わったのは奈良時代の頃で、最初の頃は薄い板状のヒノキを要で止めたものでした。やがて竹の骨に紙を貼った扇子が作られるようになりました。それが16世紀頃に中国へ輸出され、ヨーロッパにも伝えられたとされています。

名古屋で扇子づくりがおこなわれるようになったのは宝暦年間（1751～1764）で、現在の西区幅下に京都から移り住んだ井上勘造親子が始めたと伝えられています。以来、この一角が名古屋扇子の産地となって、現在も年間約200数十万本の扇子が作られています。名古屋扇子は祝儀扇や男物の量産品が多いという特徴があり、かつては贈答品としても盛んに使われていました。

多くの分業によって成立

扇子の材料は基本的に竹と紙だけです。構造もそれほど複雑にはみえません。ところが実際の製造工程は結構複雑で様々な職人さんの手を経なければ完成させることができません。竹に関する工程だけで



も、皮と腹を薄く剥ぐ「割竹せん引き」、扇骨をつくる「あてつけ」、さらに「白干し」、「磨き・塗り」、「要打ち」、「末削^{すえすき}」などがあります。紙も扇の形に裁断してから「上絵付け」、蛇腹状にする「折り」、竹骨の入る隙間をつくる「中差し」などがあり、最後に骨に糊をつけて紙の間に差し込みます。

これらの工程をおこなうのはそれぞれ骨屋、紙屋、絵屋、折り屋と呼ばれる職人さんで、どの工程が欠けても扇子を完成させることはできません。簡単に機械化ができるような作業でもなく、いずれの技も習得するまでに数年以上かかりかす。

名古屋扇子製造組合が設立されたのは昭和10年で、30～40社の扇子製造業者が集まりました。ただし組合は親睦団体としての性格が強く、骨屋、紙屋、絵屋、折り屋さんが加盟しているわけではありません。

扇子の需要そのものはそれほど減少しているということはないようです。しかも近年になって省エネへの関心が高まる中、扇子も見直されているようです。問題はやはり後継者不足です。



DATA ■名古屋扇子製造組合
所在地：西区菊井一丁目1-8 (株末廣堂)
・昭和10年 組合設立